
夢に溺れる小さな欠片

あるる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢に溺れる小さな欠片

【Nコード】

N9484C

【作者名】

あるる

【あらすじ】

7月20日・夏。夏に降り積もる不思議な雪。そんな街に住む、家が隣の幼馴染である少年と少女の不器用な話。

第1回

真白に降り積もる小さな欠片。

それは、雪だ。

肩に落ちて、じわじわとその身を溶かしていく。

路肩には、もう雪が積もり始めていた。

それを眺めて思う。

ああ、またこの季節がやってきたのか。

7月20日・夏。

僕は歩道の中心で暗雲になりつつある空を見上げて、小さく呟いた。
また、夏休みが始まる。

この雪は、そんな浮かれ気分の僕を戒めるかのように、深々と降り注ぐ。

止むことはないだろう。夏が終わるまで。

そこに現実なんてなかった。

そこに幻想なんてなかった。

そこに絶望なんてなかった。

ただ、そこには無限に広がる夢があった。

僕、久瀬宗一は雪の傍にしゃがみこみ、手袋もしていない手で、雪を掬い上げて丸める。

そして、きよろきよろ辺りを見回した後に投げた。

「あいたっ」

投げた先から声が聞こえた。

近づいてみると、ブレザーにプリーツスカートを着た制服の少女が地面に座り込んでいた。

顔を見た瞬間に冷や汗が流れる。

彼女もこっちを見てきた。そして、

「あ……………」

と今気づいたかのように声を上げた。

「や、やあ」

「待てい」

とりあえず、手を上げて挨拶をした後に、振り向いて逃げようとする僕の頭をがっちりと掴む彼女。

「僕は無実だ。釈放するんだ。そうすれば、きっと夢は叶うよ」

「なら、聞きたいことがあるのですけれど、このワタクシに向かつて石が入った雪玉を投げたのは誰かご存知かしら？いいえ、別にあなたがそうだと言っている訳ではないんですのよお？」

口元が引きつった状態で、少女は僕に問いかける。

「はっはっはっ。お嬢、何を仰るかと思えば……ワタクシめがそのようなことを知っているわけがありませんでしょう」

「そうよねえ。あなたがそんなこと知ってるわけないもの……とか言うと思ったかああああああっ！！！！！」

「ぎゃああああああああああああっ！！頭がああっ！！頭が割れるうっうっうっうっ！！！！！」

ぎりぎり締め付けられる頭蓋。少女の力とは思えないような握力。そして、そのまま雪の中に投げ捨てられた。

べちゃりという音と共に、顔面が積もった雪の中にダイブする。

「誰がやったのかなあ？」

「僕ですごめんなさい」

「よろしい」

そして、二人並んで帰る。

彼女とは友人で、僕の家の近所に住んでいる早見麻衣奈である。

「それにしても、石入りの雪玉を投げつけられるとは思わなかったわ」

「わざとなんです。ごめんなさい」

「そんなこと知ってるわよ。あんたね、ホントに反省してるんじゃないかな？」

「ごめんなさい。今度はばれない様にやりますから」
頬に強くて鈍い衝撃が走る。

「いっぺん死ぬか？」

「ごめんなさい」

殴られた頬を擦りながら、ゆっくりと歩く。

「痛い」

「それはあんたがふざけるからでしょうが。それにしても……」

「ん？」

「いや、またやってきたんだなーと思って」

「雪のこと？」

「うん。いつ見ても不思議。初めて見たときは驚いたもん。夏に雪が降ってるー！！って大声でお母さんに言いに行ったっけ」

確かに、不思議だ。

気温が低いわけではない。まあ、夏と言うにしてはちょっとばかり涼しいというか、どっちかというところ春っぽい感じである。

だが、雪は降り続け、積もり続ける。

それは魔法のようで。

幼少の頃にこれを目の当たりにした僕は、目を見開いて驚いたものだった。

だが、それも毎年続いていては魅力激減である。

家に近づいてきた。

「んじゃ、後から行くわ」

麻衣奈がそれだけ言い残して、手を振って帰っていった。
人の言い分ぐらい聞いてからにしようね。

そう心の中で思って、僕は暖を取るために家の中に逃げ込むように入っていった。

部屋でコタツに入りながらまどろんでいると、階段を上がる音が聞こえた。

で、扉が開いて騒々しいのがやってきた。

「しゅーいちー、元気いー？って、何よその眼は。騒々しいのがやってきたとか思ってたんでしょ」

「お前はエスパーか」

「まあねー。宗一に対してただけだね」

「ああ、そう」

もう麻衣奈は友達というか、幼馴染だな。

昔からよく遊びに来てるし。

年頃なのに、親が何も言わないのはそういう面もあるからなんだろう。

まあ、僕には彼女作るとかそういう色恋沙汰みたいな話は似合わないし、なんかそういうのは面倒そうだから手を出したくないというのが本心だ。

それに……まあ、この話はいいだろう。

「というか、お前は何をしに来たんだ？」

「え？私？」

コタツに無理やり入ってきたながら、キョトンとした眼でこちらを見る麻衣奈。

理由を聞いただけでここまで反応が返ってくるのは、逆に面白い。

「いや、宿題やろうと思って」

「僕の部屋でする要素ないんじゃない……」

「だって、先生いるし」

「……………」

無言で僕が自分を指差すと、麻衣奈はニコニコしながら首を縦に振

つ
た。

「僕ちよつと用事があるから」

「待てい」

コタツの中で足が組まれる。

真逆、

「ちょっと待て！！話せばわかる！！用事なくなつたから！！！！！」

「黙れい！！！！死ねえ！！！！」

「ぎやや ああああ あああ あああ あああ あああ ああつ つ！！！！！！
折れる！！！！折れる！！！！」

「きやはははは！！泣け泣けええええええええええい

!!!

四の字に組まれた足がぎりぎりと軋む。すると扉が開いて、母が入ってくる。

「あ、おば様。お邪魔してまーす」

「あらあら。いらつしやい、麻衣奈ちゃん。二人とも仲良しねえ」

「母よ、これのどこにそんな要素がある」

「宗ちゃん、麻衣奈ちゃんに変なことしちゃう駄目よ?」

「しないよ。了承がない限りは」

「なっ、それって私の了承があればやるってこと!？」

「そういう問題じゃない……ぎゃあああああああああっ！」

!!!

「あらあら、仲良しねえ。じゃあ、お茶はこつちに置いておくわね」
そう言つて、お盆を机の上に載せて、母は部屋から出て行つた。

真面目に痛い。本気で骨が折れるかもしれない。

泣きそうだった。

「どう？もう降参？」

僕は何も言えなかった。痛さもあつたけど、何より情けなかった。

「ねえ、宗一？」

麻衣奈が足を解いてこっちまでやってくる。

僕はこんな顔見せなくて、うっ伏せになった。

でも、そんなのはばれている様で、麻衣奈はゆっくりと頭を撫でてくれた。

そして、

「ごめんね」

と一言だけ謝った。

「もういい」

とそれだけ返した。

麻衣奈は頭を撫で続けてくれた。そして、僕は眼を閉じて寝てしまった。

ああ、夢が見たい。

見られるのなら、幸せいっぱいな夢が見たい。

言えない言葉を伝えたい。

僕は、こんなにも臆病で。それを何年も何年も続けている。

嫌われたくない。見捨てないで欲しい。

怖い。ただそれだけが怖い。

殴られても、蹴られても、傍にいてくれれば何をされても構わない。

僕なんかでは、彼女を捕まえておくことなんてできないから。

だから、せめて夢の中では、

その小さな幸せに溺れたい。

たとえそれが、幻想でも。問題などない。

だって、ここには無限に広がる夢しかないのだから。

溶けていく。

雪のように、まどろみの中に溶けていく。

第2回

眼を覚ますと、部屋の天井が視界に入ってきた。
どうやらあれから眠っていたらしい。

時計を見てみると、あれから1時間弱しか経っていなかった。
にしても、あれだ。

コタツが微妙に狭い。そんな気がするのは気のせいだろうか？
顔だけ右に向けて、身体中の熱が引いていくのを感じた。

何故、何故麻衣奈さんは僕の隣で寝ているんでしょうか？

焦る。焦りまくる。

できるだけ揺らさないようにして逃げようとする。

途中で肘をコタツの足にぶつけてガタンと、音がした。

「むにゅ……………しゅーいちい？」

「あはははは……………おはよう、麻衣奈さん」

「今何時——？」

「大丈夫。まだ、1時間程度しか経ってないさ。さあ、おやすみ。

存分に。むしろ寝てくれないか。今すぐに。早く早く早く早く」

「うにー、わかったー。寝るうー」

ガシリと、腰に腕を回されて抱きしめられた。

そして、麻衣奈はすぐに眠りに落ちてしまった。

「ちよっ、離せ——！やめてくれ——！！いろいろな一線を越えそう
だからやめてくれ——！！」

だが、起きない。

頬をつねってみる。起きない。

ぺちぺちたたいてみる。起きない。

おでこを小突いてみる。起きない。

しょうがないから抱きしめかえす。ぶらいすれ……

「って、何やってるんだ僕は」

でも、麻衣奈の身体は温かくて柔らかくて、

こんなことができる幼馴染の僕はすごく役得で、

この気持ちに気づいてもらえなくて、

すごく、歯がゆい気持ちでいっぱいになっていた。

本当にいっぱいだった。

麻衣奈自身、僕のことなんてちょっと親しい友人程度にしか見えてないんだろう。

あんな気持ち、感じたことなんて一度もないんだろう。

無防備な彼女を見ていると、襲ってしまいたい衝動に駆られてしまう。

でも、僕は彼女に泣いて欲しくない。

離れていつて欲しくない。

だから僕は、何も言えずにいるのだ。

関係が終わるくらいなら、現状維持がいいと思うのは本当なんだと思う。

自己防衛こそがこの気持ちの真実なんだと思う。

だからこそ、

今はここで麻衣奈の温もりを感じていよう。

「大丈夫だ、僕に非はない」

もう一度寝よう。

そうすれば、見えてくる世界も変わってくるだろう。

そして僕は、麻衣奈を抱きしめたまま、頭にまで響く心臓の音も抑えずに眠りについた。

ガチャリと扉が音を立てて開く。その音で眼を覚ました。

部屋に差し込んできた光に少しだけ眼を細めて、扉の向こうに立つ

人間を見る。

「あらあら、一緒に寝ちゃって。仲がいいわねえ」

ちなみに、母の口癖はあららとかあらまあとかである。

「起きてるよ」

「ふふっ、ごはんできたわよ。麻衣奈ちゃんも起こしてきてね」

「はいはい」

母、久瀬ひかりはうふふと微笑みながら、1階に下りて行った。

僕は麻衣奈を起こそうとする。

「おい、麻衣奈。母さんがご飯食べていくかって言ってるんだけど」

「むにゅ？ごはん？」

「そうだ。ごはんだ。だから、早く起きたまえ」

「ふあゝい」

寝ぼけてる麻衣奈を1階に連れて行って、椅子に座らせた。

「それじゃあ、いただきます」

それぞれが挨拶をして晩御飯を食べ始める。

「おいし」

「ありがとね、麻衣奈ちゃん。それにしても、宗ちゃんからそうい

うのあんまり聞いたことないなあ」

「……恥ずかしいだろ、そんなの」

「それでもねえ、一度くらいは言ってくれてもいいわよねえ？麻衣

奈ちゃん」

「そうですね。宗一、おば様みたいないい人そうそういないんだか

ら、感謝しなさいよね」

何で僕が怒られなきゃならんだ。

「麻衣奈には言われたくない」

「なにおう」

「あらあら。ホントに二人は仲良しねえ」

「これ見てどうしたらそう解釈できるんだ、あんたは」

そう言ったとき、麻衣奈が寂しそうな顔をしたのは、きっと、気の

せいに違いなかった。

「それにしても、今年も雪が降る季節になったわねえ」

母さんは窓から外を見て、感慨深い感じで言った。

「そうだな。冬にはめつたに降らないくせにな」

「あら、そこがいいんじゃない。世間とは逆のことが味わえるなんて、得だと思わない？」

「そういう考え方もあるか」

「そうね。でも、雪って綺麗だけど、儂いわねえ」

「そうかな？そんなこと思ったことないけど」

「年に1時期だけ降るのよね。でも、形は残らずにいつかは消えてしまうもの。」

まるで、人の気持ちみたいだね」

そう言つて、母さんは飾つてある写真を眺めていた。

写真には男性が一人写っている。

あれが僕の父親。久瀬明久だ。

父さんは3年前に病気で死んだ。よくある話だ。

今となっては、記憶しか残つてない。

あの頃感じていた痛みとか悲しみとかは、どこかへか消えてしまった。

まるで雪のように。

そして、僕たちは静かに食事を続けた。

食事も終わつて、母さんは後片付けを始める。

僕と麻衣奈はリビングで並んで、ソファーに座りながらテレビをボ
ーッと眺めていた。

ドラマが流れている。

登場人物である少年と少女は、甘ったるい恋愛をしていた。

僕には着いていけないようなその世界。

「そんなものはあんたの身体に訊くわよ」

「ちよつ、無理！！それは無理！！」

「黙れい!!!」

ヘッドロックをかけられる。

「あああああああああああつああ………！割れる……！割れる……！う……う……う……う……！！！」

「あつち吐けい！！！！！」

「あらあら、たいへん」

削り取られていく意識の中、僕は自分の行った行為への罰として、心の中で十字を斬るのだった。

いや、僕は知らない。あれは鬼だ。鬼に違いない。
僕は何事もなかったかのように、学校へと足を進めるのだった。

図書館は閑静なイメージどおり静まり返っており、ページをめくる音やペンを走らせる音が響いてくるようだ。

僕は適当な席に腰を下ろして、辺りを見回した。

「……………あれは」

窓際に座る女性。

高校生と思えないくらいに大人びた雰囲気で、手に持った本のページを優雅にめくっている。

ロングヘアの黒い艶やかな髪が肩にかかり、ただでさえ小さい顔を更に小さく見せた。

身長は高い。170cmあるかもしれない。

お嬢様。というに相応しい風貌だった。

見とれていた。一目惚れとかそういうのではなく、ただ純粹に見とれていた。

よく見ると、この図書館には僕と彼女の二人しかいないようだった。いつまでも見ていても失礼である。

近くから本を探してきて読み始めた。

「不思議の国のアリスですか。ルイス・キャロル」

「うわぁっ!!」

「あらあら、ごめんなさい。驚かせてしまったかしら？」

「いえ、まあ、大丈夫です」

「うふふ。ごめんなさいね。あなたがさっきこっちを見ていたようだったから、話しかけてみたの。迷惑……………だったかしら？」

「いえ、そんな全然!!」

「ふふつ、嬉しいです。隣、いいかしら？」

「はい。どうぞ」

彼女は僕の隣の席に座って、僕の方を見た。

「あなた、名前は？」

「えっと、久瀬宗一です」

「2年生よね？私は3年の綾乃静流。よろしくね」

「はい。よろしく願います、先輩」

「静流でいいですよ。先輩なんて堅苦しいです」

「につこりと笑って、先輩はそんなことを言った。」

「さすがに初対面で呼び捨ては悪いよなあ。」

「じゃあ、静流さんで……駄目、ですかね？」

「しょうがないですね、おまけですよ？」

僕はどこかで、静流さんに会ったことがあったような気がする。思い出せないけれど。

「それで、宗一くんはこんなところで何をしてるんですか？」

「休みに入って暇だったんで、本でも読もうかなと思って」

「確かに、ここは暇潰しにはいいわよね。私も大体ここにいるし」

「そうなんですか」

「そおよろ。図書館の魔法少女って呼ばれてるんだから」

静流さんと話すのは、他の女子と話すのとどこか違った。

話は弾んでいく。こんなところ、誰かに見られたら勘違いされるかもしれない。

「静流さんってお嬢様か何かですか？」

「え？違うわよ。よくある一般家庭育ちよ」

意外だった。

こんな物腰の落ち着いている女性だから、お嬢様かと思った。

「あら、もうお昼前じゃない。ちよつと話し込んでしまった。ごめんね、時間使わせちゃって」

「いえいえ。楽しい時間の費やし方だったんで、全然気にしてないですよ」

「嬉しいこと言ってくれちゃって」

「じゃあ、僕はそろそろ帰りますね」

「ええ、宗一くん。またね」

やさしく微笑んで、手を振ってくれる静流さん。

僕も手を振り返す。

「あ、そうそう」

「はい？」

「何かあったら、私のところにいらっしやい。力になってあげるから。絶対よ？」

彼女は、最後にそんな言葉を吐き出したのだった。

それにしても珍しい。僕は結構、人見知りする奴なんだけれども。あんなに安心して話すとは。

「なんとなく誰かに似てるんだよなあ……雰囲気とかが」
必死で思い出そうとする。

で、結局もう家の前。思い出せず仕舞いである。

「ただいまー」

扉を開いて玄関に入ると、掃除機をかけている母がいた。

「あら、お帰り。宗ちゃん」

ああ、なるほど。

「母さんか」

「あらあら、ママがどうかしたのかしら？」

「自分のことをママと呼ぶな」

「宗ちゃん………お母さんのこと嫌いになっただ？」

涙目で訴えてくる母。

この人は本当に子離れできない人だなと、もう何十回にも亘る心配をする。

「別に嫌いじゃないよ、母さんのことは」

「じゃあ、好きでもないんだあゝ。鬱陶しくなったら面倒だから殺すんだあゝ。」

『むしろくしゃしてやった。だが、反省はしていない』

ポカリと軽く頭を叩く。

「うう〜……はいはい。わかりました。直しますー」

「真面目に直せよ」

「うん。えーっと……………」

『同情するなら金をくれ』」

「パクリはやめろ。著作権にひっかかるぞ」

「文句ばかりー」

「当然だろうが」

「じゃあ、宗一は何て書くのさ？」

「『理由がわからない。とりあえず、親を探して聞いてみよう』」

「なんて綺麗な解答なんでしょう。吐き気がするわ」

「うるさい。お勉強なんざそんなもんだ」

「だから勉強は嫌い。面倒だし」

「勉強できなきゃ就職はできんぞ」

「私はお嫁さんになるからいいもん」

その言葉で、一瞬僕の中の時が止まった。

平静を保て。隙を見せるな。感づかせるな。

僕は大丈夫だ。麻衣奈が言ったことなんて気にしていない。

考えるな。

でも、お嫁さんになるということは、相手がいるということか？

だから、考えるなと言っている。

だが、思考は止まらない。まるで、ブレーキの壊れた電車のように。

結論という名の停車駅はとっくの昔に通り過ぎていた。

残ったのは、押し付けられている現実だけだった。

聞くわけにはいかない。距離が離れるのは嫌だ。

だから僕は、

「そうか」

とだけ言っ てぎこちなく笑うしかなかった。
そして、勉強に戻ってすぐに眠気に襲われて、ぐっすりと眠ってしま
うのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9484c/>

夢に溺れる小さな欠片

2010年10月11日01時56分発行